

福島県浪江町役場のケースを通じた疑似体験型ラーニング

使用ケース

「3.11 福島県浪江町役場職員が直面した苦闘と苦悩」



ケース紹介

デスクにいた木下は、突然突き上げるような大きな揺れを感じた。

2011年3月11日14時46分、東日本大震災が発生した。

木下は、長く大きな揺れの中で立っていることも、動くことさえも出来なかった。木下のデスクは部屋の角で壁と固定されており、揺れによって動くことがなかったが、固定されていないデスクは50、60センチメートル程揺れ動き、デスクの引出しは別のデスクとぶつかったとたん、折れるような音を出して中の書類と共に流れ落ちた。壁際にあるロッカーも倒れ始め、「ロッカーから離れろっ」という指示が飛び交った。「いつまで続くんだ」と何度も心の中で繰り返したが、ようやく揺れが少しおさまった段階で、いつも幹部が集まり会議が開かれる町議室に、町長、副町長、各課の管理職が集まってきた。

ケース「浪江町役場 (B) - 3月11日」より抜粋

木下は、全く寝付くことができなかった。1日の出来事が目を閉じると勝手にまぶたの裏に現れ、特に浪江小学校に避難しているあの町民の怒りの表情がこびりついて離れなかった。極度の疲れから、夢なのか、意識の中なのかも分からないまま目を閉じてしばらくの時間がたった。

そんな中、信じられないような言葉が耳に入ってきた。

「原発がぶっとぶかもしれないぞっ。」(野村)

木下と同様、本庁舎でしばらく仮眠をとった野村は、災害対策本部室にある自家発電によって見ることができるテレビから、午前5時44分、福島第一原発から半径10km圏内の避難指示が発令されたことを知った。

ケース「浪江町役場 (D) - 3月12日」より抜粋

避難所の様子は一言で言うと、ひどい混乱状態であった。特に家族と連絡がとれない、親戚や知り合いの居場所が分からない、といった町民の不安が大きな要因であった。

町民たちから見て取れる疲労しきった表情の中には、悲しみや怒りの感情もはっきり現れていた。特に怒っている町民がいる場合には、自分で対応するより野村に連絡し、野村に対応してもらうことをお願いした。実際、野村のような管理職の立場のものが対応するとおとなしくなることが多かった。

その様子を木下とともに見ていた後輩の石田も見ていた。

ケース「浪江町役場 (G) - 3月13日」より抜粋

福島県浪江町役場のケースを通じた疑似体験型ラーニング

本プログラムでは、浪江町役場職員のヒアリング調査および震災直後から日単位で残されている役場職員162人の行動記録に基づき作成された、「個人」に焦点を当てたオリジナルケースを使用します。震災前の浪江町役場に始まり、震災直後、1日目、2日目、3日目・・・と2ヶ月間に渡って日を追う毎に、浪江町役場の職員が混沌の渦に巻き込まれていく実体験をケースを通じて疑似体験し、全ての前提が覆された状況の中で、自ら考え判断し、行動することの迫体験を通じた学びを提供いたします。

使用実績

(一例) 浪江町役場 職員研修 2014年8月27日実施

震災後に役場へ赴任された方々を対象としたラーニングセッション。災害発生時の疑似体験を通じて、正誤の判断がつかない事象に対して、自ら考え意思決定を行う、体験型学修。



【参加職員からのフィードバック】※一部抜粋

「震災時の状況が分かるとともに、シミュレーション形式の設問なので、自分に置き換えて考え、非常時のための訓練になる。」

「いろいろな問題が起こる中で「絶対の正解」などというものはないと感じた。ただしその中でも自分自身が考えられる最大限の行動をとり、町民の方にプラスになるようにしていかなければならないと感じた」

「震災を経験していない職員でも臨場感のある文章及び司会進行により、まるで震災後業務を経験したような、そんなセッションでした」